FIELD NOTE

no. 69 Jun.

特集

春をたのしむ

FIELD NOTE

2011.6 No.69

CONTENTS

特集

06 春をたのしむ

08 冬のなごり　春のはじまり

10 本日おでかけ日和　散歩に行こう

12 地域へ贈る雛まつり展

16 春のびんづめ

18 フィールド暦

20 フィールド・ミュージアムのたのしみ⑬　春が始まるとき　自然に信を置く温かいまなざし

24 都留で「農」に学ぶ3年目の春

28 沢へ

30 こんな春みつけた。
32 春が過ぎて
34 昔ながらの味をまもる
36 走る
38 センサーカメラが捉えた動物たち
40 ヒミズを見る
41 中屋敷からこんにちは 道端からひらいた春
42 大桑山便り
44 Field Note News
46 編集後記

【ギャラリー写真　撮影者のことば】

右上（04.29　オオカンサクラ）：前澤志依

図書館のビオトープ付近で見かけました。しばらく曇り空が続いていたので、久しぶりの青空にサクラも喜んでいたのでしょう。

右下（04.27　ヒトリシズカ）：香西恵

早朝、元坂から楽山公園にでる「都留自然遊歩道」を散歩しました。足元に点々と顔をだす姿は何かの道しるべのようでした。

左上（04.18　クロモジ）
左下（04.27　レンゲ）：西教生

春に咲き、春らしいと思う色の花を撮影しました。花の色は、そのときどきの風景とマッチしていると思います。

『フィールド・ノート』では「都留の自然と人との交流」をテーマに、地域の自然・人・文化に関する情報を記録し、発信しています。裏表紙のロゴの絵はアメリカのナチュラリスト、ヘンリー・D・ソローの著者『ウォールデン　森の生活』の初版本扉に、ソローの妹、ソフィアが描いたものです。ロゴにそえられている「Grow　Wild」はソローの言葉で、その思想をわたしたちも大切にしたいとの想いを込めました。

FIELD MAP

2011.06 FieldNote

P.8-9「冬のなごり春のはじまり」
平井造園

P.28-29「沢へ」

至勝沼
中央自動車道
R20
中央本線
はつかり
大幡初狩線
せいはちやま
清八山
1593
ほんじゃかまる
本社ヶ丸
1630.8
つるがとやさん
鶴ヶ島屋山
1374.4
高川山
975.7
おすたかやま
御巣鷹山
1775
木無山
1732
三ッ峠
1785.2
大幡
P.10-11「散歩に行こう」
勝山城跡
金井
中津森
大幡川
加畑川
加畑
あがさか
下谷
つる
R139
つるし
中央
中屋敷フィールド
中央自動車道
柄杓流川
ひがしかつら
とおかいちば
つるぶんか
だいがくまえ
やむらまち
西桂町
至富士吉田
夏狩
十日市場
桂町
田原
上谷
桂川
大野夏狩線
都留文科大学
境
古渡
法能
八つ沢フィールド
大桑山フィールド
P.34-35「昔ながらの味をまもる」
木の実せんべい
菅野川
尾崎山
967.8
小野
鹿留川
倉見山
1156.2
大沢フィールド
P.12-15「地域へ贈る雛まつり展」
ミュージアム都留
大津
富士吉田市
鹿留
文台山
1198.8
大野
都留市
しゃくし
杓子山
1597.6
ししどめ
鹿留山
1632.1
忍野村
みしょうたい
御正体山
1681.6
石割山
1413.6

特集

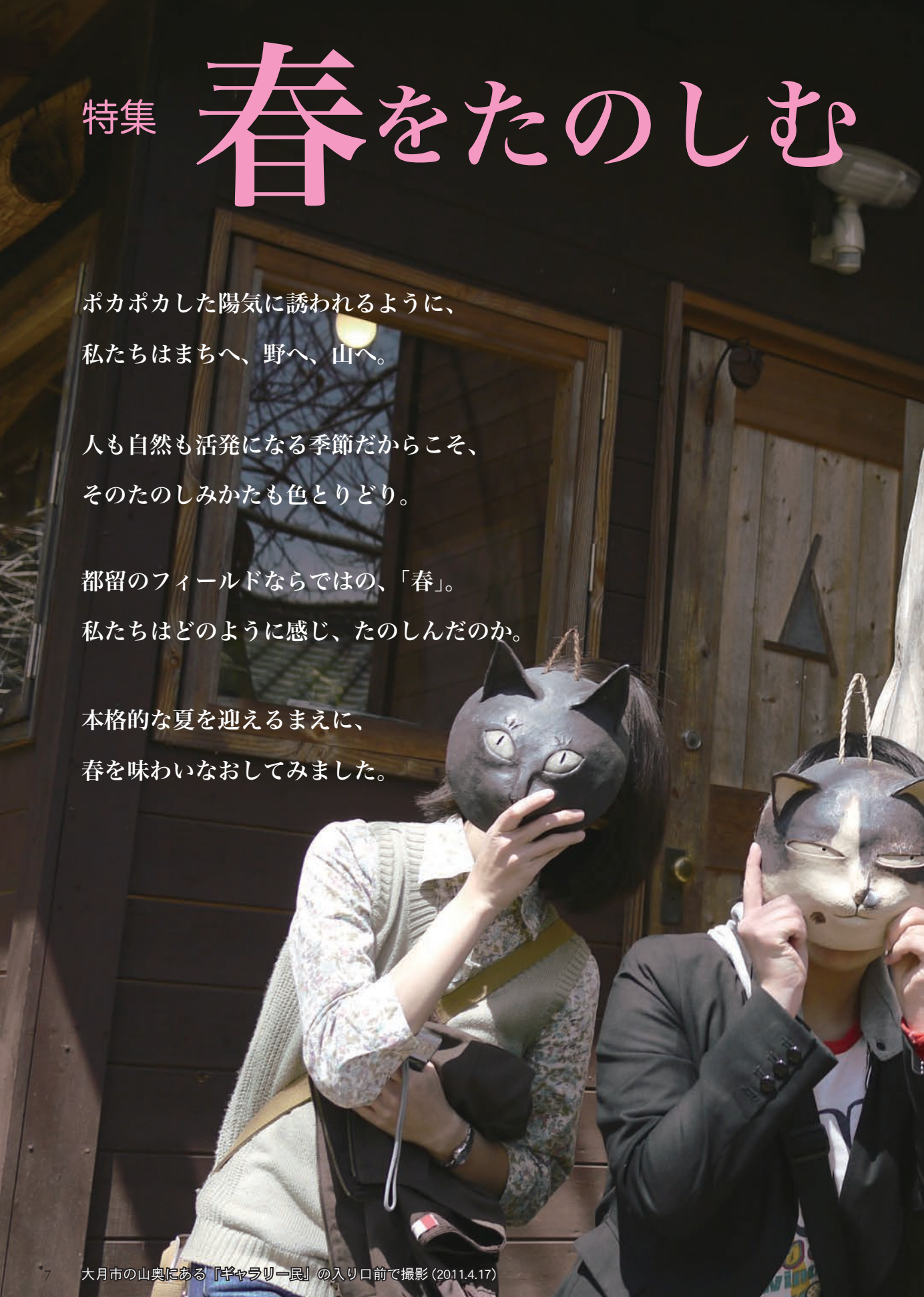
春をたのしむ

ポカポカした陽気に誘われるように、
私たちはまちへ、野へ、山へ。

人も自然も活発になる季節だからこそ、
そのたのしみかたも色とりどり。

都留のフィールドならではの、「春」。
私たちはどのように感じ、たのしんだのか。

本格的な夏を迎えるまえに、
春を味わいなおしてみました。



大月市の山奥にある『ギャラリー民』の入り口前で撮影（2011.4.17）

冬のなごり 春のはじまり

雪吊りは、気づいたらなくなっている。ぱっと雨傘のように広がり、冬の寒空を彩った雪吊りは、毎年いつとも知らぬ間になくなっていた——

庭木が武装しているようにも見える、雪吊り。じっさい、冬に備えた装いだ。冬寒く雪の積もるところで、アカマツなど、庭木を守るために取りつけられる。庭木の周りを覆った縄が、枝に雪を積もりにくくし、積もったとしても折れにくいように支えているのだ。雪吊りに使う材料はわらやシュロ、タケなど、ほとんどが植物。樹高にあった長さの柱を木全体の中央に立て、そこから下げたわら縄で枝を支える。

近ごろでは積雪地域でも取りつけるところが減っているいっぽう、雪が降りそうになくても、冬の風物詩だからと毎年庭に取りつけるところもある。

雪吊りの個性はてっぺんに一番よくあらわれている。「飾り結び」と呼んでわら縄をクルクルと巻きつけるところもあるけれど、都留や大月ではわらでつくった笠、「わらボッチ」をつける。仕上げにくくりつけた黒のシュ

左右の写真：４月 14 日、大月市初狩にて撮影。５月のはじめに取りはずしていた。平井造園（＊）では４月はじめに取りはずすそうだが、山間部のこの地域では遅い時季の雪に備えているようだ。てっぺんの飾りが「わらポッチ」

ロ縄は、雪吊りの頭をきわ立たせる決め手だ。背の高い雪吊りが頭にかぶった小さな笠。どこかお祭り道具に見えておもしろい。

晩秋、都留だと11月の終わりごろに現れる、雪吊り。庭木を覆う飾りは、冬を知らせる。寒さに備えているんだな。これから、もっと寒くなるんだな。わらで厚着をした庭木を見て思わず身震いする。

冬を越した雪吊りは春先にバラバラになって、庭木は自由になった枝をのびのびと伸ばす。ちょうど、暖かくなって冬の寒さを忘れていくように、雪吊りはそっと身をひそめて春を知らせるのだ。

現れるときは冬を告げ、なくなるときは春を知らせる。姿を見なくなってから一ヶ月が過ぎた。わらの飾りとはしばらくお別れだ。

聞いた話では、雪吊りのてっぺんにわらでつくった鶴を乗せる人もいたという。どんなふうに取りつけられるのだろう。どんな鶴なのだろう。いつか見られる日が来るだろうか。

まだまだ遠い冬。冬に上を向くのが今からたのしみになってきた。

石川あすか（社会学科４年）＝文・写真

＊都留市田野倉にある平井造園のかたにお話をうかがいました。ご協力ありがとうございます

参考文献：『庭木の手入れと雪吊り』、中山草司、金園社、１９９７

本日おでかけ日和

散歩に行こう

私の周りには、散歩を実践している人がたくさんいる。歩くことにはどんなたのしさがあるのだろう。暖かな陽気に誘われて、私も散歩を始めてみることにした。

見ごろを迎えたソメイヨシノ（2011.04.13）

「明日はおでかけ日和となるでしょう」。前日の天気予報がいっていたとおり、4月5日は気持ちよく晴れ渡った。空には雲ひとつなく、日差しがとても眩しい。時折、涼しい風が吹き抜ける絶好のおでかけ日和だ。久しぶりにスニーカーを履いて、いざ春をたのしむ散歩に出発。

街なかをゆく

人通りが多い道をはずれ、ひとり陽のあたる細い路地を進んでいく。道に面した住宅の庭には大小さまざまな花が植えられ、風景に彩りを添えている。冬に歩いたときとは少し違って、街なかはどこか明るい印象だ。野山にはもちろん、街なかにも春は訪れている。

暖かい季節になり、外で遊ぶ子どもたちに出会うことが多くなった。「こんにちは！」と挨拶を投げかけながら駆けていくその姿は、春風のようにとても清々しい。なるほど、子どもは風の子、元気な子。彼らの姿を見かけると、こちらまで元気が湧いてくるから不思議だ。「よし、彼らに負けないフットワークで歩いていこう」。そう心に決めながら、週末の散歩は続いていく。

分かち合う春

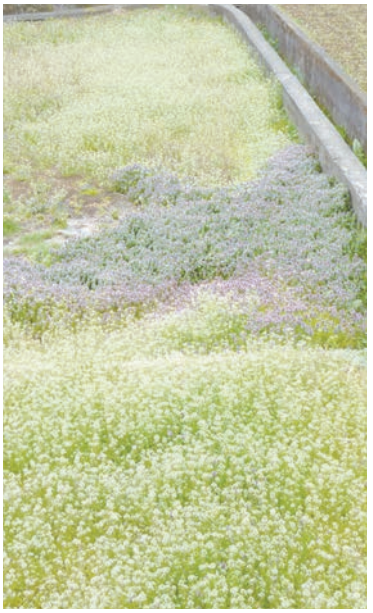
桜の蕾（つぼみ）がふくらみだすと、屋外に赴くたのしみはもっぱら桜を観察することになった。今までは花が開いたときにしか意識したことがなかったけれど、散歩を続けるうちに枝先へ目を向けるようになっていた。時々足を止め、蕾のふくらみ具合を見たり、満開はいつごろかなと予想してみたりする。いたって簡単な観察ではあるものの、定期的に訪れることで刻々と移り変っていく花のようすがよくわかり、些細でも変化している点を見つけるのがおもしろかった。

はじめは、こうして桜が開花していく過程を自分ひとりでたのしんでいるつもりだった。でもふと視線を下ろすと、私と同じように頭上を仰ぎ、桜に見入りながら歩く人の姿がたくさんある。ときには道すがら行き交う人と、お互い視線をおろした瞬間に目が合ってしまうことも。そんなときは少し照れくさいけれど、同じものに魅せられているという実感が小さなよろこびとして湧いてくる瞬間でもあった。

4月10日、この日は編集部の4人で桜の名所、勝山城跡へでかけた。散歩はひとりで歩くのもいいけれど、誰かと一緒に歩くのもまたよさがあると思った。

春を探し、見つめる視線は人によってさまざまで、それぞれが注目するポイントは違う。農作業が始まった畑や、足元に咲く草花、桂川の釣り人など、ほかの人に指摘されなければ見落としていた光景、気づかなかった春の一面が意外に多かった。数人の仲間と連れ立って歩くことで、それぞれの発見や各自が見ている風景を共有することができ、自分の視野がどんどん広がっていく。

勝山城跡を目指して歩くなかで、複数の視点から得るものが多いこと、誰かと分かち合うたのしさがあることを知った。



ナズナの花の白さに
ヒメオドリコソウの紫が映える
（2011.04.10）

雨上がりの匂い

当初私は、雨の日に出歩くのが億劫（おっくう）だった。雨水で服やカバンが濡れるのはいい気がしないし、なにより靴が濡れるのが好きではなかった。でも散歩をするようになって、その捉え方は少しずつ変わっていく。

しとしと雨が降る日の散歩は、感じるものがとても新鮮だった。霞がかった山並みは普段よりも色濃く、ひときわ鮮やかな新緑が目に飛び込んでくる。人影の少ない街なかはひっそりと雨に濡れ、道も建物も晴れの日には見せなかった表情をしている。たえず穏やかな雨音が聞こえる街からは、いつになく静まりかえった雰囲気を感じた。

帰路につくころには雨が上がって、日が差し始めた。気温が上昇するにつれて、雨上がり独特の匂いがやってくる。この匂いを言葉でどう表現したものか。その場に臨めば、「そうそう、この匂い」とわかるのに、素直にぴんとくる表現が思いつかない。いったい、なんの匂いなのだろう。花や木などが放つ匂いだろうか。それとも土の匂いだろうか。はたまた湿ったアスファルトの匂い……？

うまく言い表せない歯がゆさを感じながらも、いつもと違う空気につい深呼吸したくなった。

＊　＊　＊

同じところを歩き、同じものに注目するなかでも、その季節や天候、時間帯といったもので、周囲の見え方や感じ方が変わってくる。その日によっては、思いがけない発見や新しい出会いのきっかけにつながっていく。ときに誰かと一緒に歩くことは、きっとその手助けにもなってくれるだろう。前日の天気予報はあまり気にせず、思い立ったら迷わず屋外に足を運んでいきたい。

私にとって晴れの日も、雨の日も、いまではそれぞれが魅力ある「おでかけ日和」になっている。

雨上がりの大学周辺（2011.05.01）

牛丸景太（国文学科2年）＝文・写真

地域へ贈る 雛まつり展

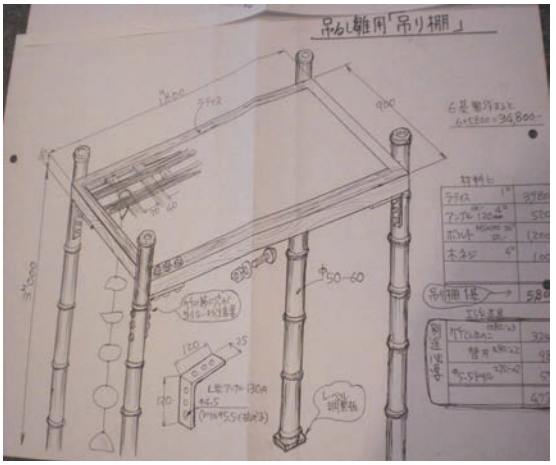
谷村にある「ミュージアム都留」で4月9日～5月5日まで開催されていた『第二回 城下町つるの雛まつり展』。とくに目立っていたのは、「館（やかた）」と呼ばれる、柱が竹でできていて、天井が格子で、床は畳を敷いた小さなスペース。そして、館の格子に飾ってあるたくさんのつるし雛だった。

館に飾ってあるつるし雛（2011.04.30）

4月10日、「ミュージアム都留」の出入口に、雛壇をモチーフにしたゲートを見かけた。そのかわいさにふらりと立ち寄ってみる。会場内に入るとまず6つの館が目に入った。館に飾られているつるし雛は、ミカンやフクロウなどの雛飾りとしては一風変わった種類のものが多くある。使われている赤や黄色の鮮やかな布がパッとまわりを明るくさせているようだ。掲示してあった『つるし雛紹介』によると、昔、高価な雛飾りの代わりに、さまざまな事物（じぶつ）を題材にして、手づくりの雛飾りをつくり、初節句をお祝いしたことから由来しているらしい。ていねいに組み立てられた館にそれぞれ違うものが飾ってあり、異なる雰囲気が楽しめる。たくさんの展示ものに時間を忘れるほど夢中になった。これらはどのようにつくっているのだろうか。後日、雛まつり展実行委員会の重原千恵子（しげはらちえこ）さん（80）を訪ね、館とつるし雛に携わった方々を紹介していただいた。

館の存在感

4月22日、この日お会いしたのは、重原さんと鈴木平二さん（71）、渡辺長重さん（78）。鈴木さんと渡辺さんは、たくさんのつるし雛をきれいに見せるためにはどうすればいいのかを考え、館をつくった。今回の雛まつり展に参加したきっかけを尋ねると、「もともとつくることが好きだったんです」と笑顔で鈴木さんが言う。館の全体図が記されている設計図を見せてもらった。設計図には、材料の数、全体の高さや大きさは何cmになるかと具体的に記されている。また、天井にはどこでもつるし雛が飾れるように、どのくらいの長さの格子を用いるかという案もあった。さらに材料の値段まで記されている。細かいところまで考えられているなあ、と思わず感嘆の声を漏らす。「でも、これはまだ完成図ではないんですよ」と鈴木さん。じつは、館の柱が竹ということもあり、強度が弱く、少しの揺れでもグラグラしてしまったらしい。そこで、つるし雛がどこからでも見られるように、目立たないところで補強するという考えをもとに、下部分を補強。そのさい、竹をボルトで止めていたら、竹にヒビが入ったという苦労もあったそう。展示準備が始まる3月31日まで試行錯誤を繰り返し、ようやく今の館の形が完成した。



館の設計図（2011.04.22）

でも、展示をしている期間にも問題が発生したとのこと。竹が乾燥して、少しずつ縮んでいき、ネジが緩んでくるという。だから、3日に1回はネジを締めに来るらしい。「私たちは素人だから最初はよくわからなかったんです。いろいろと失敗を重ねてようやく完成しました」と達成感に満ちた表情で鈴木さんは教えてくれた。

また、「ミュージアム都留」を入って右手の館から順番にねこやなぎ、すみれ、たんぽぽ、梅、桃、菖蒲と名前がつけられている。

「春の最初に咲くのがねこやなぎで、それからどんどん春の花が咲く順番に名前をつけてるの。少しでも春を感じてもらいたいと思って」

最初に館を見たときから何の意味があるのかと気になっていたが、名前の由来には重原さんの熱いこだわりがあった。どうして館の柱に竹を使っているのかを質問すると、渡辺さんが「竹は昔からすくすく育つといわれてて、縁起ものだから」と教えてくれた。館にも子どもの成長を願う縁起ものが登場していることに驚いた。

最初に訪れたときは、つるし雛や雛人形ばかり見ていた。お話を聞いてからあらためてじっくりと館全体を見る。6つの館はそれぞれの柱も、青竹や黄色い竹、まっすぐな竹や曲がった竹と一本一本色も形も違っていた。世界に6つだけのお手製の館もひとつの作品だ。見せかたひとつ工夫するだけで見えやすくなり、作品全体の印象も変わってくるのだろう。上から下まで人の手で一からつくられた館だから、飾りかたも自由自在に考えることができる。メインをよりよく見せるためにはどうしたらいいのか、鈴木さんと渡辺さんの想いと試行錯誤した跡が館には深く刻まれている。

ボルトを使用してヒビが入った柱の竹（2011.04.22）

会場を入ると正面にある雛壇（2011.04.30）

つるし雛への想い

翌日、再び「ミュージアム都留」を訪ねる。この日重原さんに紹介していただいたのは、つるし雛をつくった方々だ。6人ほどのグループで森屋愛子さん（58）が先生を務め「梅の館」に作品を展示している。森屋さんたちは前回の『つるの雛まつり展』を見て、かわいいと思い、自分たちも子どもたちのために、と考え今回つるし雛を作成した。これらは、すべて手縫いだという。「一つひとつが小さいから、逆にミシンでやるほうが大変かも」と森屋さん。孫や地域の子どもの出生、健やかな成長を願いながら一針一針に心を込めて、1年かけて完成させた。長い月日をかけて手の平サイズのつるし雛をたくさんつくっていくことを考えたら、とても大変そうだ。そう感想を伝えると、「家事の合間とかにゆっくりつくっているからそんなに大変じゃないかな。それに展示会があるからがんばれました」と森屋さんは作成していた期間を思い出しながら明るく返してくれた。

雛まつり展の最中につるし雛を見て、子どもが喜んで頬擦りをしていたとの話も聞いたという。「そういうのを聞くとやっぱり嬉しいですね」。そう言う森屋さんたちは、本当に嬉しそうな顔をしていた。最後までつくりあげたからこそ、誰かが喜ぶ姿を見ると嬉しさが倍増する。もしかしたら、つくりあげるという力の源はそこにあるのかもしれない。

また、こだわりはつるし雛の材料に縮緬や古布を使っていることだという。古布は、家にあるもう使わない着物の布だったり、いただいた布だったりするという。「80年前の布とかもあるし、成人式の時の着物とか私のお姉さんの着物とかも使ってるの」。そうお話ししてくださったのは西村理子さん（69）。西村さんがつくったつるし雛のほとんどが家にあった古布を使っている。つるし雛をよく見てみると、少し色褪せているものもあり、着物だったときの名残りがある。同じ種類のものをつくっていても、材料の布がそれぞれ異なるので、違ったものに見えておもしろい。

思い出の詰まった着物を材料にすることがもったいなくないのかと西村さんに尋ねると、「もう使わないからねえ」とすぐに返答があった。思い出が詰まった着物を長いあいだ仕舞っておくよりも、違う使い道で、違う形にしてこれからも活かしていく。そうすれば、子どもたちの目にも触れ、楽しんでもらうことができる、という思いが西村さんにはあるのだろう。思い出だけでなく、子どもを想う気持ちが新しく込められる。つるし雛として生まれ変わった布は、色褪せていても何十年前に織られた着物だったとは思えないほど生きいきしているように見えた。

つるし雛以外にも多くの作品が飾ってある（2011.04.23）

「つくる」を通して

「うまい、へた関係なく、心が込もっていることが大事。今回の雛まつり展では、（運営から展示まで）たくさんの人が関わってくれた。それが都留のまちにもっと広がってくれればいいなと思う」

そう重原さんがおっしゃった言葉がとても印象深い。手づくりの作品を展

示するだけでなく、第二展示会場には代々受け継がれてきた雛人形も展示されており、歴史にふれることもできる。古いもので江戸時代末期のものもあった。イベントのひとつとして、24、30日に自分たちで手軽に雛人形をつくる「体験コーナー」もあり、私もじっさいにフィルムケースを材料にしたフィルム雛を作成した。展示を見て終わりというだけではなく、いろいろな視点から雛まつり展を楽しめる。

重原さんは今回参加して、たくさんの人たちと出会い、協力し合うなかで、いいものにしようという想いを感じ、とても感動したという。たくさんの人が集まって『雛まつり展』という大きな作品をつくる。子どもからお年寄りまで多くの人たちに楽しんでもらえる展示会。重原さんいわく、「つるし雛は親たちからの大切な贈りもの」。私も手づくりの贈りものをするとき、贈ったときの相手の嬉しそうな姿を想像すると、私自身も笑顔になり、一生懸命につくろうと気合いがはいる。相手への想いが形にも表れるのだと思う。作品の一つひとつが違って見えるのは、それぞれに込める想いのカタチも材料のひとつになっているからなのかもしれない。つるし雛だけでなく、会場全体が展示会に足を運ぶたくさんの人への大切な贈りものだ。

もう一度会場内をぐるりと見回す。そこには、子どもからお年寄りまでたくさんの人が、展示されている作品を真剣に、嬉しそうに見つめるまなざしと笑顔があった。会場全体から感じられる賑やかさとやさしさが、春というあたたかい季節に彩りを加えているようだった。

前澤志依（国文学科2年）＝文・写真

体験コーナーで飾られている見本
(2011.04.30)

つるし雛紹介

草履

足が丈夫になる
早く歩けるようになりますように

はいはい人形

子どもの健やかな成長を願う
生まれたて、はいはいするようになった喜び
這えば立て、立てば歩めの親心

カメ

長寿の象徴
カメは万年
かわいい子がどうか長生きしますように

フクロウ

呪力がある
「福」や「不苦労」
をかけて

ミカン

寒い冬にたえる

春のびんづめ

見る、聞く、かぐ、味わう、触れる。五感をつかって
「春」を堪能する。いっぽうで、「春」が過ぎていくのを惜しむ。
「春」をまるごと、しばらくのあいだ眺め、味わい、手に取って
たのしむ方法はないだろうか。瓶に詰めることで、ひと味違う
「春」のたのしみが広がっていきました。

早春、甘夏の季節がやってくる。私は毎年この時期になると、その年に食べる分の甘夏のマーマレードをつくる。「甘」とついているけれど、甘夏は、酢っぱくて、苦い（しばらく置いておくと、ちょっとずつ甘くなる）。この苦味と酸味、そして香りに、じんじんと春を感じる。

ヘタのところに十字に切れ目を入れ、皮を剥こうとして立ちのぼる香り。少しも、甘くもたれるところのない、すっきりと媚びない香りに、自分のなかに冬のあいだこもってきたいろんなものをはき出して、すがすがしい空気を満たすような、そんな気持ちになる。

甘夏のこの香りは、身をそのまま食べても味わえない。マーマレードにして初めて、まるごと堪能できると私は思う。

きざんだ皮を果汁に一晩浸し、砂糖を加えて煮詰める。ひと房ずつ果肉を袋からとりだして、種を除き、手でぎゅっと搾り、ボールいっぱいのきざんだ皮がすべて浸るくらいの汁を集める。だんだん指先が黄色く染まってゆく。できあがったマーマレードは、つやつやと輝き陽の光をぎゅっと集めたよう。それをあるだけの瓶に詰め、蓋をキュッとしめて、机の上に並べて眺める。

今年もできてほっとする。私にとってこれは、新しい年度を迎えるための信頼のおけるお供でもある。これで今年もまた新しく始められる、そんな気持ちになるのだ。

毎年必ずやってくるその季節、季節の仕事。自分がその一年どんな日々を送ろうと、変わらずに訪れる。そのことに励まされ、安心してまた次の一年を送ることができる。私にとってそのひとつが、甘夏だ。

甘夏のマーマレード

皮をきざみ、水でゆすいで苦みをとり、果汁に一晩浸けて火にかけて砂糖と煮詰める。種をとっておいて、水に煮出してペクチンをとり、とろみをつけるのに使う。できたら煮沸した瓶に口まで詰める。

八重桜の酵母（漬けてから２日目）

瓶に水と花を入れ、蓋をしめて常温で置いておく。毎日朝と夕に振って蓋をあけ、味見をしてようすをみる。だんだん泡がでてくる。２日～１週間くらいで発酵して酵母になる。できたら冷蔵庫で保存。花の色がでて、桜色の水になる。

４月下旬になると、いつのまにか八重桜が満開になっているのに気がつく。本学一号館の裏、グラウンドとの境にも八重桜の木がある。

あるときその木の下で、パンを焼こう、と友人と話していた。八重桜の花を酵母にしてはどうだろう。桜の花や葉の塩漬けはあるけれど、酵母にするというのは聞いたことがない。けれど野菜や果物で酵母はできるのだから、花でもできるはず。やってみよう。土手にのぼり低いところに垂れている枝先から、花を摘んだ。いくつかかたまっているまとまりごと、摘んでいく。どうせあとは散っていくのだし、と思い切って摘み始めると、思いもかけない贅沢な気持ちになった。ふだん野の花を見ても摘もうとは思わないから、花を摘む、というのはこんなに贅沢なものだったのかと知る。顔を近づけると、かすかにふわっと、スーッとするような花の匂い。たしかに桜餅の匂いに通ずる。これが桜の匂いなんだろうか。

煮沸した瓶に水を入れ、そこに花を沈め、蓋をして置く。洗わずに、花粉もガクも、まるごと入れる。そこについている菌が働いて、酵母ができるはずだ。

１日たつと、桜のまわりにびっしりと気泡ができ、２日すると水が半透明に濁り、かすかだった香りが、際立ってくる。ツンと少し漬物のような、発酵した匂い。爽やかな香りが広がって、そのままの花からは想像できない、けれど、かいでみればたしかにこれは桜の匂いとわかる、不思議な感覚。眺めるだけでは味わえなかった、桜が内にもっていたものが、瓶に閉じ込めることで魔法のように立ち現れてくるのだ。

ふだん、花を摘もうと思わないのは、摘んだらすぐに枯れてしまうし、そのままが一番だと思うからだ。果物や野菜も、あまり加工せずに、そのまま味わうことのほうが多い。手を加えすぎると本来の味がわからなくなってしまうと感じるからだ。

けれど、手を加えることで広がっていく、初めて出会うことのできる世界がある。

結局、八重桜の酵母は発酵のピークを逃してしまったようで、パンにしたけれど膨らまなかった。もう一度酵母をつくってみようと思っても、葉桜になってしまっている。時季を逃すともうできない。やっぱり、年に一度の味なのだ、と噛みしめる。つづきは来年の春にとっておこう。

私の春のたのしみが、またひとつふえた。

香西恵（社会学科３年）＝文・写真

フィールド暦

自然が豊かだといわれるこの都留の春には、一体どんな生き物や植物が息づいているのか。じっさいに歩いて確かめてみた。

サクラの樹に独特の白黒模様をしたヨコヅナサシガメがいた。ただいたのではなく、20匹以上もが集まり、身を寄せ合っていた。不思議に思い近づくと一目散に散らばってしまった。

ヨコヅナサシガメが身を寄せ合っていた辺りを詳しく見てみたが、彼らの餌となるような虫はおろか、樹液すらも出ていなった。では、なぜ身を寄せ合っていたのだろうか。

季節は春になったといえども、夜は冷えることがあり、都留の春も例外ではない。

ヨコヅナサシガメは幼虫で越冬する昆虫である。集団越冬といい、彼らは何十匹も集まり、身を寄せ合って冬を越す。

もし、夜の冷え込みに堪え切れず集団越冬のように夜を明かしていたのだとしたら、暖かいだけではない春の一面を垣間見たような気がした。

ヨコヅナサシガメ
2011.05.08
楽山公園

フデリンドウ
2011.05.08
楽山公園

楽山公園へ向かう途中の土手に、淡い青紫色をし、天を仰ぐ可愛らしい大きさの花を見つけた。小さいがために、周りの草の影が落ち、まるで木漏れ日の中で健気に咲いていた。

美しく淡い青紫色を湛(たた)えるこの花の名前はフデリンドウ。直立した茎の先端に尖った蕾(つぼみ)が付く姿からその名がついたという。春になると筆のような蕾が優しげな雰囲気を纏(まと)い、その美しい姿を私たちに披露してくれる。

ひたむきに咲くフデリンドウの姿を堪能し、立ち上がって周りを見渡すと、彩度の高い緑色の葉のなかに、ちらほらと明度の高い青紫色が顔を出していた。なかには枯葉だらけのところに咲いているものもあり、淡く色づきながらも、個性を主張するような姿にはとても心惹かれるものがあった。

オトシブミは、緑が深まる季節に、自分の身体よりも何倍もある木の葉を小さな口と脚を駆使し、切り込みを入れ、畳み、巻くという複雑な作業をこなす。そして、その葉に卵を産みつけ、円筒状のゆりかごをつくる。

今回、私は二つのゆりかごを見つけた。一つはオトシブミそのものの名のように葉から切り落とされたもので、本学自然科学棟の近くにたくさんのケヤキの葉で作られたゆりかごが落ちていた。

もう一つは、楽山公園の近くで、コナラの葉で出来たものだったが、これは切り落とされず、わざと葉からぶら下げてあるものだった。

オトシブミは種によってゆりかごを作る葉や、葉の切り方が異なるという。

緑が深まりつつあるなか、いろいろなゆりかごの違いを見てみるのも、春という季節の楽しみ方かもしれない。

オトシブミの仲間のゆりかご
2011.05.08
(上)楽山公園(下)自然科学棟付近

都留市の春に見られる
代表的な生きものを紹介します

ヤマブキの花
2011.04.27
中屋敷フィールド

ミヤマキケマンの花
2011.04.27
中屋敷フィールド

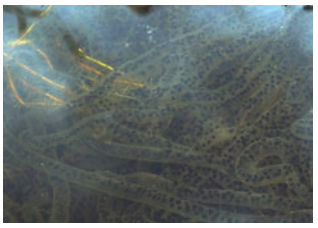
ベニシジミ
2011.04.27
中屋敷フィールド

ウスバシロチョウ
2011.05.08
中屋敷フィールド

オドリコソウの花
2011.04.27
都留市田原

イチリンソウの花
2011.04.30
大沢フィールド

ハンミョウ
2011.05.08
中屋敷フィールド



アズマヒキガエルの卵塊
2011.04.27
都留市十日市場

ワサビの花
2011.04.30
大沢フィールド

木村元美（国文学科１年）＝文・写真　　フィールド・ノート編集部＝写真

第13回

フィールド・ミュージアムのたのしみ

H・D・ソローが『ウォールデン　森の生活』（今泉吉晴訳、小学館）で示唆した散歩のほんとうの意味とは何か。散歩をとおして見えてくるものとは。私たちは歩くことで、変貌する自然やまちの今を記録し、フィールド・ミュージアムのたのしみを報告していきます。

春が始まるとき

●文・写真　西教生（本学非常勤講師）

ウメの蜜を吸うメジロ

山歩きで一番好きな時季をひとつ挙げるとするなら、それはやはり春が始まるころです。ほとんど一年中、野山に出ているのですが、冬から春へ移り変わるときはほかの季節とは違う一種独特の喜びがあります。冬が終わり、春が始まる。気温が少しずつ上がり、暖かくなるだけで楽しくなります。これは多くのかたに共通の感覚ではないでしょうか。

ソローは、『ウォールデン　森の生活』の第17章で、「森で暮らしたらどんなに楽しいだろう、と私が夢を描いた理由のひとつは、そうすれば春がやってくるのを知る、豊かで確かな機会と自由で贅沢な時間を持てることでした」と言っています。

山で見られる生きものは、春が近づくにつれ、徐々に変わっていきます。2月に入ると、私たちが手入れをしている果樹園のウメが、今年はいつほころぶだろうかと気にし始めます。ウメの開花を待っているのはメジロやヒヨドリも同じようで、花が咲くと蜜を吸いにやって来ます。昆虫の少ない春先、ウメの受粉作業を引き受けてくれているのは、ほかでもないメジロやヒヨドリです。

テングチョウ

ある日、いつもの山道を歩いていると、日当たりのいい地面を動くものが目に止まりました。茶色い虫が飛んでいます。忍び足で近づき、枝の上で休んでいる姿をのぞき込むと、翅のオレンジ色が見えました。テングチョウです。その近くには、落ち葉の上に止まっているミヤマセセリもいます。これらのチョウは、春を告げる昆虫のひとつです。道にクモの巣が目立つようになるのもこのころ。すると、ダンコウバイやキブシの花が咲きだします。日ごと、山に花が増えていき、木々の芽が萌え出ます。その淡い色に彩られた風景は春先だけのもので、初夏のそれとは違い繊細な感じがします。

このほかにも、ヤマアカガエルの産卵や、道ばたで見つかるヒミズの死体など、春の始まりを特徴づける出来事がつぎつぎに展開され、季節の移ろいを知るわけです。

これまでに見知ったことであっても、それを毎年見る喜びは、見るたびに発見があることでしょう。録画した映像を繰り返し観賞するのとは違い、野山で出会う生きものの行動は毎回おなじではありません。

ヒミズの死体

ミヤマセセリ

自然に信を置く温かいまなざし

●文・写真　北垣憲二（本誌発行人）

「すりばち池」で産卵するアズマヒキガエル

ダンコウバイの黄色い花が森で目につくようになると私は春の訪れを感じます。ダンコウバイは中屋敷では3月中旬あたりに開花が始まります。しかし、散歩で出会う地域のかたがたはそれぞれ独自に春の訪れを感じておられるようです。

◇

5月8日、散歩をしていると、苗床の見回りにこられた清水貞一さん（87）と出会いました。昨年は体調が思わしくなく稲作をしませんでしたが、それは60年をこえる農業人生で初めてのことだったそうです。貞一さんにとって春は苗床の準備から始まると言います。「秋まで長いつきあいになるだ。でも今年は少し苗の生長が遅いようだね」。貞一さんは、言葉ではうまく説明できない天候の変化を肌で読み取り、長年の経験を頼りに苗床の準備にかかります。

同じ日、畑の作業に来られた中野新作さん（83）にも出会いました。新作

清水貞一さんの苗床

さんにとって春の訪れは、子どものころに捕ったカエルの思い出がもとになっています。地元で「ゴトンベエ」と呼ばれるアズマヒキガエルは、毎年、桜が咲く季節の暖かい夜、十日市場の桂川沿いにある池に集まり産卵をするといいます。地元のかたがその形から「すりばち池」と呼ぶ池に、アズマヒキガエルが集まり始めると春の訪れを感じるそうです。

私の観察小屋がある大沢でお世話になっている佐藤和男さん（64）にとっての春の訪れは、コブシの開花です。コブシの花は山菜採りが近づいたことを和男さんに告げます。観察小屋に向かう林道に迫る急斜面を見上げると、まだ葉を出さない木々のあいだから確かにコブシの白い花が見えます。谷間に位置する都留市では、この季節、山々のどこにコブシの花が咲いているかがすぐに見てとれます。まるで「灯台」となって自らの位置を知らせてくれているようです。

散歩の途中で地域のかたがたと立ち話をしながら、私は毎年、調査に通う福島県檜枝岐村の漁師のことを思い出しました。２０００メートルほどの山に囲まれた檜枝岐村は、尾瀬の登山口としても有名です。この村の源流部では、毎年5月ころハコネサンショウウオが産卵のため沢に集まってきます。それを捕る漁師たちは、残雪の量だけでなくヤマツツジの開花などを観察し、それに自らの経験を重ねるようにして漁の開始時期を決めます。漁の開始時期前に、漁の期間の漁獲量まで予想できるといいます。

◇

こうした判断は、自らの感覚と長い経験とを重ねあわせ、自然の微妙な動向を読み取り判断するみごとな技芸のように私には思えます。ひとつの生きものの暮らしだけでなく、気候やほかの生きものを結びつけ季節の移ろいを見極める。それにはていねいな観察の繰り返しと結果の見直しという作業が伴っていることでしょう。それだけに地域の自然をよく見ておられると言えるのではないでしょうか。

語っていただいた季節の感じ方はそれぞれちがいました。しかしそのどれもが地域の人と自然との関わりを物語る貴重な資料です。自然に信を置く温かいまなざしが伝わってくるこうした生きた資料を聞き取り、記録として大切に残していきたい。これが私の散歩の次なる課題です。

コブシの花

都留市上谷にある「work-waku 都留」の畑。トウモロコシの種を蒔く前に、土に油かす・鶏ふん・馬ふんを混ぜるようす（2011.5.11）

都留で「農」に学ぶ３年目の春

「農」ある暮らしが若い世代に浸透しているという話をよく耳にする。私もその一人だ。都留に暮らしはじめて３年目の春。「農」との出会いから見えてきた都留の魅力、自分自身の変化を振り返った。

崎田史浩（社会学科３年）＝文・写真

土いじりが春をうたう

このごろよく自問することがある。「農」の魅力とはなんだろうか、と。都留に来て3年目になる。今年も3月までは寒さがやわらぐことなく、地元、兵庫県南西部と比べると一足おそい春を感じた。

外に出たら気持ちいいだろうなと心が躍るような感覚。それが、今までの春の感じかただった。けれど、今年の春は少し違った。4月上旬のよく晴れた週末。まちを出歩くと、耕耘機（こううんき）の音が耳に入ってきた。音の先に目をやると小さな畑があって、土いじりをしている人の姿が目に映る。暑いわけでも寒いわけでもない、穏やかな晴天。こんな日は農作業にぴったりだ、と共感している自分がいた。そろそろ土を起こして、野菜を育てる準備をする時季が来たんだなと、頭に浮かんできた。それは、今までにはない春の感じかただった。きっと、都留で畑に携わってきた2年間があったから得られた感覚ではないだろうか。そう気づいたとき、春のたのしみがまたひとつ増えたような新鮮な気分になった。

夏のトウモロコシとの出会い

「農」は農家のもの。そう思い描いていたイメージが一転したのは、大学1年生の春。「農」ある暮らしとは縁遠かった私は、「work-waku（わくわく）都留」というサークルに入ったことがきっかけで、野菜づくりに挑戦することとなった。鉢やプランターでの野菜づくりの経験はあったが、2アールほどの広さの畑を耕すのははじめてだった。

雑草だらけで手入れがされていない畑を、夜11時すぎまで耕したのが私の畑デビュー。当時は、畑の地主さんに一部分だけ土地を借りて野菜を育て始めていたなか、すぐ真横に雑草だらけの土地があって気になっていた。地主さんによると、その土地は昨年まで市民グループが使っていたが、今年は使わないので耕して使っていいとのこと。それなら、雑草だらけのままではもったいないという一心で、鍬（くわ）を振りおろしていた。そのとき、夜遅くまで雑草と格闘するようすを見ていた畑の隣に住むかたが、いなり寿司とお茶を差し入れてくださったのを今でも覚えている。

差し入れのご厚意もあって過酷な開墾作業を乗り越えた達成感からか、授業の合間をぬって、畑に通える環境を気に入りだしていた。

だが、夏が近づくにつれ、草抜きの大変さを身にしみて感じるようになった。アルバイトや授業の課題に追われ、定期的な畑の手入れは後回しになりがちだった。そうなると、土日にまとめて草抜きをするという始末。雑草だらけの畑は見た目も悪く、反省することもしばしばであった。

1年生の8月中旬。サークルで育てていたトウモロコシが実り、はじめての収穫作業がやってきた。背がぐんと

都留の「農」風景

畑づくりに取り組む学生。場所は十日市場（2011.4.24）

中屋敷フィールドにある麦畑。麦の土寄せをしに訪れた（2011.5.4）

都留市法能に広がる田園。田植えを迎え水が張ってある（2011.5.11）

高くなっているにも関わらず、たくさんの蟻が茎によじ登り、トウモロコシの甘さを求めていた。ふと足元をみると、周りには蟻の巣がいくつもあった。畑の開墾が生き物を呼び寄せるのだと、なんとなく感じた瞬間である。

収穫を終え、家で茹でて食べようと思っていたら、一緒にいた先輩が、「茹でなくてもそのまま食べられるよ」と言う。それはさすがに出来ないなと半信半疑であったが、勧められるままかじりつくと、瑞々しい粒がプチプチと弾けて、口いっぱいに甘さが広がる。

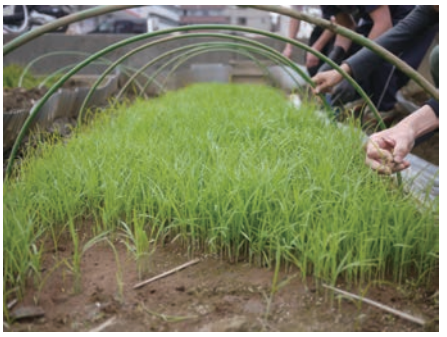
トウモロコシといえば、祖父母が夏休みになると毎年段ボール一杯に詰め込んで送ってくれる夏の風物詩だ。そのため、自分でトウモロコシを収穫できた喜びから少し誇らしい気持ちを抱き、この出来事をきっかけに畑とより深く付きあいたくなった。

畑や田んぼに集(つど)う学生たち

本学には、「農」に関わっている学生が多い。その多様な存在に気づいたのは2年生の秋。私自身、2年生になってから授業の一環で大豆栽培をはじめていた。都留には「アオハタ大豆」と呼ばれる在来種があることを知り、ぜひ育ててみたいとの思いから、メンバー6人が集った。無農薬と農薬の比較栽培を試みながら、手探りで育てて収穫した大豆は、味噌に加工した。

「農」との関わりが深くなった1年間を過ごしているうちに、同じように都留で畑や田んぼで活動をする学生との出会いが増えていった。もともと大学内には畑に携わっている団体があるのだが、ここ数年新たに立ち上がったばかりのものもいくつかあるのだ。静かながら学生のなかで高まっている「農」への熱を感じる。私と同じように、都留に来てはじめて野菜を育てたという人が多く、体験談を交えて思いを共感しやすかった。しかしなぜ、都留の学生は「農」へと向かう人が多いのか。その答えは、もう少し彼らとと

「田んぼクラブ」での活動



右上：田んぼの一角を囲い苗床をつくるようす(2011.4.24)

右下：苗床をつくり、コシヒカリの種もみを蒔いた(2011.4.24)

左下：種もみを蒔いてから2週間後の苗床のようす(2011.5.16)

左上：雨の降るなか、苗を一本ずつ手で植えていった(2011.6.12)

もに、畑や田んぼづくりに汗を流していけば見えてくるような気がする。

「都留」の見方が変わるとき

小さなまちだと思っていた都留。でも、「農」との出会いによって、まだまだ未知の広さと可能性を持ったまちに思えるようになった。

今年から、学生が主体となり本学近くの田んぼでコメづくりに励む「田んぼクラブ」にも顔を出すようになった。畑を知ったから田んぼも覚えたいという興味からだけではない。きっと2年間、野菜や大豆をつくることを通して、見慣れてきた食べ物をつくることに自然と興味が湧いていたからなのかもしれない。

おもしろいことに、畑や田んぼで作業をしていると、いつもは通り過ぎていただけの風景がガラリと変わり、土と近い距離にいることを意識する。こんなに近くに土はあって、そこでは野菜や大豆、コメをつくることが出来る。今までは勝手に遠い存在に感じていた畑や田んぼが、じつは日常にあったのだ。もし、都留での暮らしがなければ、私はじっくり腰をおろして土と触れあうことがなかったように思う。そう思うと、都留で大学生活を過ごせていることが、しみじみとありがたいことだなと感じる。

都留に来た1年目は、「都留にはなにもない」と、友だちと漏らすことが多かった。しかし、都留をよく知ることで、そこでの暮らしも充実したものになってきている。そのひとつが、畑や田んぼでの活動である。畑や田んぼに携わることがなかった学生でも、長靴を履いて鍬をもって土を耕せるのだ。畑や田んぼと隣りあわせの暮らしを体験できる都留は、私のお気に入りのまちである。

惜しいことに、大学生活も残り2年をきった。野菜づくりは、一年ずつ経験や発見を積み重ねながら、自然のリズムを掴んでいけるから楽しいのだ。都留であと2年しか暮らせないのかと思うと、少し寂しい気持ちを抱くようになった。だからこそ、都留でのあと2回の四季を、これまで以上に心と身体にしっかり刻みたい。

「農」に取り組む学生団体が共同で開催した合同説明会（2011.5.17）

人生で初めての田植えをする筆者（2011.6.12）

沢へ

5月1日朝5時頃から昼過ぎにかけて、都留市朝日曽雌（あさひそし）の山間を流れる大旅沢（おおだるみざわ）と、鹿留を流れる大沢（おおさわ）にて沢釣りをした。30年以上前からこの辺りで沢釣りを楽しむ父の教えのもと、慣れない沢沿いの道なき道を登りながら釣りを楽しんだ。ただ歩くでも、ただ釣るでもない、歩きながらの釣り。ふだんとは違う目線から沢の魅力を感じることができた。

沢の釣り

沢での釣りは下流から上流へ、川の流れに逆らいながら魚を追って進んでいく。沢の途中には大きな岩が転がっており、岩が水の流れをせき止め、小さな滝を作り出している。小さな滝の下にできる溜まり、なかでも水の流れが緩やかで、数十cmから1m弱深さがあるところ。さらに岩陰など隠れられるような場所に、魚たちは身を潜めている。

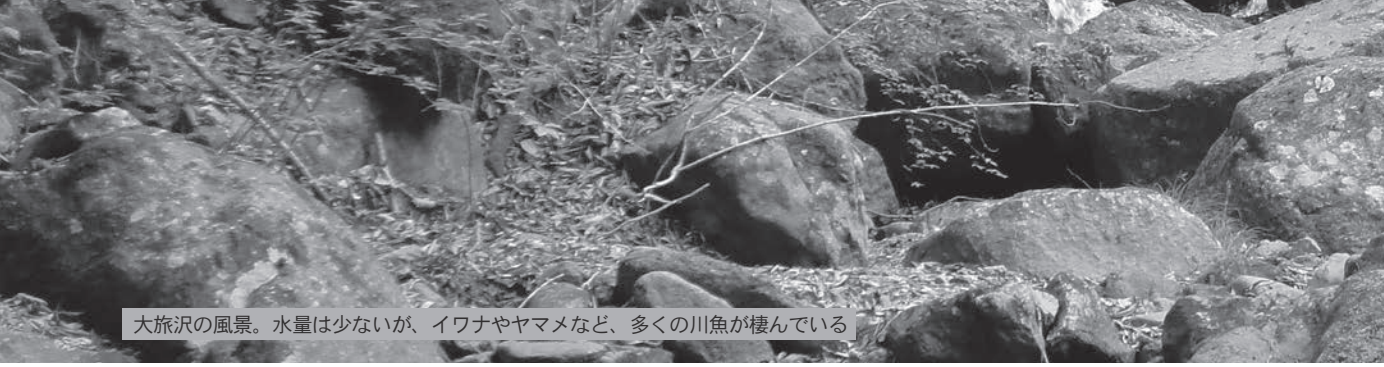
沢で魚を釣るときに一番重要なのは、魚がいるポイントと自分の立ち位置の見極めだ。どんなところに潜んでいるのか、釣り上げるためにはどの位置から、そしてどんな方法で針を投げ入れるのかを考え、慎重に動かなければならない。そしてそのポイントに針を落とした後も、感づかれないようにおびき出すにはどのように針を流すべきかなど、一瞬も気が抜けない。

どう動くべきか、それを考えるためには周囲の環境を注意深く見る必要がある。ただ魚のことを考えているだけでは釣りはできないのだ。それを意識しながら釣りをしているうちに、川の周りの植生が気になってくる。沢歩きに慣れない始めのうちは、手をつく岩にむすコケや足元に転がる石くらいしか見えていなかったが、徐々に慣れてくると河原の自然を楽しみながら釣り歩くことができるようになっていく。川縁にはヤマブキの黄色い花がいっぱいに咲いているところだった。

繋がっているということ

川魚は、人はもちろん糸の影にすら敏感に反応しすぐに隠れてしまう。魚のいるポイントは沢の各所にあるから、投げ損じた場合や、三回ほど投げても当たりが出ない場合はすぐ移動して次のポイントを狙う。多く釣りを楽しむためというのもあるが、魚を驚かせすぎないためにも、一つのポイントに長居しないのが沢釣りのマナーだ。あまりに魚を驚かせると、どんなに条件の整ったポイントでも魚は出にくくなってしまう。

大旅沢の中流で、周りに障害物がなく、魚影（ぎょえい）もはっきり見えている釣りやすそうなポイントを発見した。父は「うまく投げ入れれば（魚が針を）食ってくるぞ」と言う。ところが魚はかからない。針を追って来るようす



大旅沢の風景。水量は少ないが、イワナやヤマメなど、多くの川魚が棲んでいる

[沢釣りをするときの装備品]
右のシューズは川のなかでも滑りにくいように、靴底が工夫されている。左は釣り専用ベスト。ポケットがたくさん付いていて、道具を持ち歩くのに便利だ。胸には、川で魚を釣るために必要な入漁券をつける。入漁券は釣具店やコンビニで購入できる

[今回の沢釣りで使用した、「フライ」と呼ばれる毛針]
釣り場の近くに棲む虫に似せて作られている。右は蚊に似せたもので、左は羽虫に似せたもの。どちらも父が、鳥の羽と糸とを針に巻き付けて作ったものだ。２人で釣りをするときにはいつも、父お手製のフライを使う

もなかった。それを見た父は「ここはだめだ。良いポイントだけど他の釣り人にだいぶ驚かされているから」そう言って上流へ進んでいった。

荒らされたポイントに当たるのは、私の沢釣り経験のなかでこれが初めてのことではなかった。私はこのようなポイントに当たるたびに沢釣りの難しさを感じる。釣ることに意識を向けているだけではいけないのだ。「あとから来る人のことを考えて」、父は私に何度もそう言った。沢と自分だけでなく、自分とほかの釣り人との繋がりをひしひしと感じた瞬間だった。

沢、その魅力

今回の釣りでは、私の釣果（ちょうか）はゼロだった。それでも私は沢釣りが好きだ。魚を釣り上げること以外の魅力が沢にはある。川縁の植物や小さな羽虫、目の前を凄まじいスピードで駆け抜けていく小さな鳥。そのすべてを感じながら釣りをする。沢では、多くの生きものが手の届くどころか、顔が触れてしまいそうな距離にいるのだ。じっと凝らして魚を探す目が、いつの間にかまったく関係のない鳥に奪われている。私にとっての沢は「釣り」というよりも、「出会い」の場なのかもしれない。

アメリカのナチュラリストであるH・D・ソローは、彼の著作『ウォールデン　森の生活』のなかで、釣りを魚との「交信」と表現しているが、私の解釈はまた少し違う。釣りという行為じたい、私はスポーツや遊びというよりも、「問いかけ」というふうに解釈している。釣りのなかで、自然や魚と交信できるまでの知識や技術・経験が足りていないだけなのかもしれない。でもだからこそ、私の沢釣りはいつも新しい出会いに溢れている。

なぜこの魚はこんなに上流まで上ってきたのか、どうして川縁にはこの木がたくさん生えているのか、あの虫は……というように、一歩進むたびに不思議との出会いがある。その不思議が自然への問いかけになっていく。どんな形になって答えが返ってくるのかもまだ分からない。それでも私の針を追ってくるあの小さな魚が、私の問いかけにどう答えてくれるのか、それが知りたいから「また行こう、また歩こう、また釣ろう」と思うのだ。

持田睦乃（社会学科３年）＝文・写真

こんな春みつけた。

春との出会いはひとそれぞれ。その出会いの形もさまざまです。こんなところにも、春の世界があったんだ。そんなささやかな春との出会いをお届けします。

ブックレビュー

『しあわせな葉っぱ』

おーなり由子、新潮社、1995

２月の半ば、中央本線で山の谷間をゆられていた時のこと。窓の外を眺めていると、山の木々に明るい若草色が点々と見えた。あ、芽が出ているな。そう思ったら同じ種類の木が何本も目に入ってくる。樹種によって芽の生え方や生える時期が違うから、あれもあれもとどんどん見つかっておもしろい。なかま探しゲームをしている気分である。

本書は、頭から芽が出た女の子の話。頭上に生えた葉っぱはリボンみたいだけれど、ほかの人には見えないらしい。女の子は葉っぱを通して、あったけれど見ていなかった世界を見つけていく。

ひょんなきっかけから、世界はがらりと姿を変える。いま見えている世界以外にも目の前に広がる世界はもっとたくさんあるのかもしれない。新しい世界の発見は、春の発見とどこか似ている。　（石川あすか）

『月刊たくさんのふしぎ 春をさがして カヌーの旅』

大竹英洋、福音館書店、2006

「ポルタージュ」と呼ばれる道があります。そのあたりで暮らしてきた人によって踏み固められてできた、湖と湖をつなぐ道です。本書ではこの道をとおって、湖と湖を渡りながら、カヌーで旅をつづけていきます。

カヌーを降りてポルタージュを歩くと、いろいろなものが見つかります。クマやムースの糞、シカの頭骨、花をつけはじめた草……。ぬかるんだ土や湿った森の空気、生きものの息遣い。ページをめくると、澄んだ冬の空気のなかに、春の匂いが漂ってくるようです。

先人の踏み跡をたどって、春の訪れをさがしにゆく。その新しく重ねられた踏み跡がまた、のちに訪れる人や来年の旅の道しるべになるのだろう。そうしてつながっていくものや、何度も更新されながら変わらずに春を告げる、そこに住む生きものたちが身を置く時間の流れに思いを馳せる一冊です。（香西恵）

写真から聞こえた春の声

蕾

前澤志依

まだ見たことのない世界を想像して
静かな寝息を立てて眠ります

夢のなかは思い描いていた景色であふれていて
思わず笑みがこぼれるのです

雪がうたう歌が止んだころ
やさしいお陽さまがやってきて
描いていた景色に色をつけていきました
それは
果てしなく広がる虹色の世界
これはきっと
もうすぐ会える外の世界

太陽が手を引いて
道案内をしてくれます
風は「早く起きて」と
私の体をくすぐります

すると、ぽっと温かくなったのを
体で、心で感じました

目が覚める5秒前のことでした

春が過ぎて――

葉や花が次から次へと芽をひらき、
生きものたちがざわざわと動きだす。
まだ肌寒い空気のなか、
春を告げる小さな音は
ひとつ、またひとつと、
重なりあって響いていく。

春のたのしみは人それぞれ。
そのたのしみを振り返り、
じっくりと噛みしめ、
誰かと一緒に分かちあってみる。

そうしたら、たのしみはぐんと広がって
新しい春と、であえた気がする。

春がきた。
そう思っていたけれど
いつのまにか初夏をむかえ、
梅雨があければ暑い夏はすぐそこだ。

季節はいつだって
通り過ぎてはまた戻ってくる。

来年、
春にあえることを
たのしみにしている。

昔ながらの味をまもる

都留市田原の国道沿いに『元祖珍名菓子　新厚焼木の実せんべい』と書かれた看板がある。このおせんべい屋さんをご存じだろうか。おせんべいのみを販売しているお店というのがなんだか珍しい気がして、訪ねてみることにした。

おせんべいを口に運んで、うむむ、とうなりたくなる。前歯では噛み砕くことができない。奥歯の方へもっていき、手でもっている方に上向きの力が加わるようにして……そこでようやくおせんべいを口のなかへと入れることができた。口に広がる山椒の風味と歯ごたえを楽しみながら、そのかたさに驚く。この厚いおせんべいをつくっているのが、泉屋さんだ。

茶色い布地に白い文字で大きく『せんべい』と書かれた暖簾をくぐってお店に入る。茶色やベージュを基調とした落ち着いた雰囲気の店内はおせんべいと同じ山椒の匂いが広がっており、ガラスケースのなかにはおせんべいが並んでいる。話を聞かせてくれたのは伊藤茂子さん（50代）と、娘の綾子さん（20代）。泉屋さんでこのおせんべいを焼くようになってから70年が経つそうで、現在は三代目、家族でお店を営んでいる。

◇

泉屋さんのおせんべいの特徴はそのかたさと、生地に山椒を入れるところ。看板に書いてある文字からもわかるように厚さにこだわりがある。「ふつう、おせんべいって一回焼いておしまいなんですけど、それを三回繰り返してものすごくかたいおせんべいをつくっているんです」。タネ（おせんべいの生地）を焼いて、そのうえにまたタネを重ねて焼く。確かに噛み砕いたおせんべいの側面を見てみると白と茶色の層にな

っていた。これがかたいおせんべいの秘密のようだ。「毎日焼いていますけど、うちで売り切れてしまうので、そとは大月駅の売店にしか出していないんです」。茂子さんの言葉からその人気ぶりが想像できる。おせんべいは、できるだけ焼きたてをお客さんに渡したいという想いから、つくり置きはしないそうだ。

茂子さん一家の一日は、朝7時頃から準備して午前中はずっとおせんべいを焼く。焼きながらお店を開けて、午後は袋詰め。そして、夜の7時まで営業するという。朝におせんべいを買いに行けば焼きたてが食べられると教えていただいたので、後日、あらためてうかがってみた。

落ち着いた雰囲気の店内。ガラスケースにはおせんべいが並ぶ。泉屋と書かれた暖簾の向こうは厨房

焼きたてのおせんべいは白い紙に包まれて私の前に登場。できたてを食べたことがないので、わくわくしながら受け取ればまだ温かい……というより熱い。ちょうど熱した鉄が曲がるように、柔らかくて、ぐにゃりと簡単に手で曲がる。それが面白くて、曲げて遊びたくなる。だが、すぐに固まってしまうと聞いていたので、おせんべいを口に運んだ。モチーとした歯ごたえで、おせんべいが歯から受けた衝撃を吸収し、歯の力で圧縮されるような感じだ。おせんべいによって口のなかが温かくなる。焼きたてのほうが固まったものより山椒の風味が少しだけ強いようだ。しかし、噛み切るのに時間がかかるというところは同じ。おせんべいの最後のほうは食べているあいだに固まっていた。「やっぱり焼いているところでないと。ただ売っているところだとそういうのはないですよね」。

焼きたてのおせんべいを食べるという経験はなんだか新鮮で、少しだけ得をした気分になった。

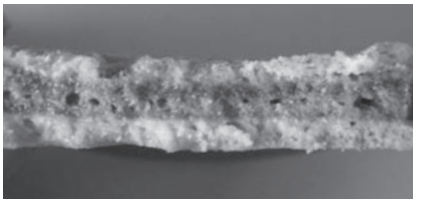
「ちょっと教わったからできるものじゃなくて、やっぱり何年も修行を積んでいかないとできないことだから」と綾子さんは言う。おせんべいづくりに職人というイメージがなかったので修行が必要だということに驚いた。おせんべいの長い歴史や味を引き継いでいくこと。泉屋さんのおせんべいづくりはただのお菓子づくりとは違うようだ。

おせんべいのみでお店を経営していくことは自分のつくるおせんべいに自信がなければできないだろう。泉屋さんにとっては仕事として当たり前になってしまったことかもしれないけれど、自信をもってお客さんにおせんべいを提供する姿勢はかっこいい。

◇

「レシピがあってできるものじゃなくて、感覚かな。長くやらないとできない」。

以前取材でうかがった錺屋（かざりや）さんも同じような話をしてくださったことを思い出す。感覚、というとなんだか最初からもっている才能のようなイメージがあるけれど、そうではないことに気がついた。長い時間と労力を費やして自分なりに培っていくものだ。泉屋さんの言う修行は技術とともに、感覚を鍛えるものなのだろう。そうして鍛え上げられた感覚と技術が合わさったとき、本物の職人としていいものをつくることができるようになるのではないかと思った。



上：おせんべいの断面。白と茶色の層になっている
右：これが噂の木の実せんべい

そして、文章を書くということも同じなのかもしれない。悩んで、書き直して、自分を見つめることを繰り返して、ひとつの文章を書き上げる。まだまだ感覚で自分の納得する文章を書くことはできないけれど、その繰り返しのなかで自分なりの感覚を鍛えていきたい。

藤森美紀（社会学科3年）＝文・写真

走る

都留のまちをめぐる朝

少しだけ早起きをして、ジョギングに出かける。いつもとは違う時間、いつもとは違う速さ。そうすると、まちは私が今まで知らなかった顔を見せてくれた。

4月になって何か新しいことを始めたいと思い、友人と朝にジョギングをすることにした。それから現在まで、天候などに左右されるものの、ほぼ2日に1回のペースで続けている。

始めたころには富士急行線 谷村町駅まで走るのが精一杯だったのが、4月の半ばには都留市駅まで行くのが当たり前になり、5月の頭には、私のアパートから約3㎞の距離にある赤坂駅まで、足を伸ばすことができるようになった。そのあいだに蕾だったサクラは散り、かわって赤紫のツツジが家々の庭先を彩り始めた。

勝山城跡から都留のまちを望む

6時半、友人と本屋「BOOKS KATOH」の前で待ち合わせをする。各自で準備運動をしたら、いざ出発。夜のうちに冷えた空気が、頬をすぅっと撫でていくのが心地良い。

最初は軽快だった足も、体力の消耗に合わせてだんだんと重くなっていく。都留の道は歩道が狭いうえ、舗装されていてもデコボコしているところが多く、少し走りづらい。地形も体力を奪う要因だ。坂は、歩けばどうということはないのに、走って越えようとすると途端に牙をむく。苦しいと思いつつも、ゴールが近くなればまた自然と力が湧いてくる。駅前で息を整えながら汗を拭って、走ってきた道のりを思い返す。汗の量だけ、達成感も増える。家に帰ってくるころには8時になっていた。

いつもよりちょっと速いスピードでまちを駆け抜けるのは、歩いているときの感覚とは違う。足で地面の感覚をよりダイレクトに感じることができるし、鼻先をかすめる匂いや目の端で捉える色はぼうっと見ているときよりも記憶によく残る。

走っているときの自分は何も考えていないように思う。ただ五感で触れるものをそのまま受け入れている。世界が自分のなかに入り込んでくるような、逆に自分が世界に飛び込んでいくような、そんな感覚が好きだ。

これまで大学に登校するギリギリまで睡眠をとることが日常だった私にとって、早朝の都留はとても新鮮だ。7時半過ぎには小学校の登校時間と重なるためか、集団登校する児童たちをよく見かける。家を出たときには静かだった道路も、戻ってくるころには少しずつ車の通りが多くなっている。だんだんとまちが賑やかになっていくようすは、この時間でしか味わえない。

そんな生活を繰り返しているうちに、何度か顔を合わせる人ができた。走りながらすれ違う人たちとは、お互いに名前も知らない。それでも、目が合うたびに「おはようございます」と言葉を交わす。会う約束をしているわけでもないのに、今日もその人がいると何だかほっとする。こんな関わり方もあるのだと思う。

じつを言うと私は走ることそのものは好きではない。けれど、家に帰る途中で「また頑張ろう」と思えるのはなぜなのか。走る場所が自分の住むまちであることが、答えの一つかもしれない。私にとって走ることは、日々移りゆくまちなみや、変わらずそこにいる人たちに会いに行くことだ。出会いの一つひとつは小さなものだけれど、続けていくうちに私と都留を強く結ぶつながりになっていた。会いに行こうという気持ちが、「頑張る」ことを苦痛ではなくたのしみにしてくれる。

4月当初のゴール地点だった谷村町駅を横目に駆け足で通り過ぎるたび、もっと遠くまで行けるような気がしてくる。季節もそろそろ春から夏へと移ってきた。何となくで始めたジョギング、もう少し続けてみようと思う。

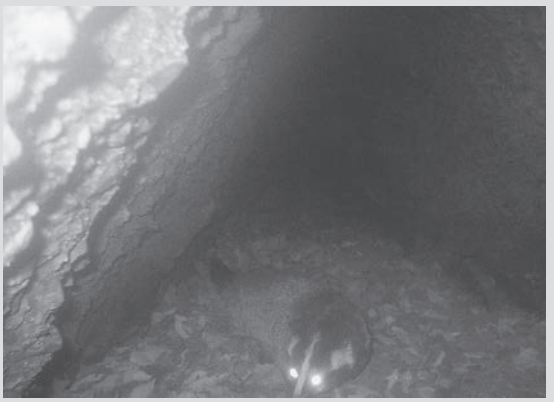
大澤かおり（社会学科3年）＝文・写真

谷村町駅と都留市駅のあいだにある高尾神社の前を走る友人

センサーカメラが捉えた動物たち

キャンパス周辺のフィールドでは 2008 年 10 月から赤外線カメラによる動物の撮影をおこなっています。今回は 2011 年 2 月～ 3 月に撮影された動物の一部を紹介します。
身近なフィールドにはどのような動物たちが暮らしているのでしょうか。

●本学フィールド・ミュージアム＝文・写真



ハクビシン　中屋敷フィールド　2011.03.23

キクガシラコウモリ　中屋敷フィールド　2011.02.01

タヌキ　大学キャンパス　2011.02.15

シロハラ　中屋敷フィールド　2011.03.21

ノウサギ　大学キャンパス　2011.03.11

テン　大学キャンパス　2011.02.17

アナグマ　大学キャンパス　2011.03.29

ネコ　大学キャンパス　2011.03.02

リス　大学キャンパス　2011.02.14

ヒミズを見る

『野ネズミの森』（今泉吉晴、フレーベル館）に紹介されていた、ヒミズと出会う方法。ガラス板を地面に置くことで、彼らの姿を間近に見ることができるならば、とさっそく試してみました。モグラの仲間であるヒミズは落ち葉や倒木の下を掘り進むといいます。彼らが暮らしている場所は意外と近くにありそうです。

狩野慶（ゆずりはら青少年自然の里）＝文・写真

積み上げられた丸太を動かして、その下をのぞいてみます。じっとりと黒く固まった土に残された、幅3㎝ほどの溝。左隣の丸太の下から続き、この丸太の下で止まっています。この溝にヒマワリの種を数粒落として丸太を元の場所に戻しました。すると、次の日にはまるごときれいに無くなっています。面白くなって再びヒマワリの種を置いてみると、次の日にはまたきれいになくなっていました。

3月30日、じっさいにガラス板を置いてみます。丸太の下に差し込むように置くと、数日後、丸太の下から続く溝がガラス板の下へと進んでいました。曲がりくねったり、Y字に分かれたり。ガラス板の下にあらかじめ置いたヒマワリの種に誘われるように、その溝は日ごとに伸びていきます。

ビデオカメラを設置して撮影してみると、しっかりとヒミズの姿が映されていました。長く伸びた鼻をひくひくさせながら、少しずつ、しかし進むときはすばやく、前へ進んでいきます。ヒマワリの種をくわえると、急いで丸太の下へ。ガラス板の上の落ち葉が風で転がったときも、その瞬間に急いで丸太の下へ戻っていきました。ガラスの下を進むことはヒミズにとって冒険であり、丸太の下は安心できる特別な場所のように見えました。

黒い毛で覆われた真っ黒な顔に、細長い鼻。毛がまばらに生えた長いシッポ。なぜこのような姿をしているのだろう、と不思議に思います。

もっと近くでその姿を見るために少し工夫をしてみます。直径3㎝のアクリルパイプをガラス板の下に斜めに差し込みます。片方に直径7㎝ほどのフタ付きの丸いケースをとりつけて、そのなかにヒマワリの種を置きました。パイプを通って、地上に置かれたケースのなかの種を食べるヒミズの姿を、横から近距離で見ることができるようにしました。

からだを左右に小刻みに動かしながら、ヒミズはパイプのなかを勢いよくのぼってきます。パイプから顔だけのぞかせて、近くにあるヒマワリの種を鼻でさわり探り当て、口にくわえると、また勢いよくバックして戻っていきます。何度かそのような動きを見せたあと、ケースのなかに身を置き、からだを丸めて種を食べるようになりました。

細長い鼻は彼らにとって周囲の世界を探る大切な道具のほかに、近くの獲物をたぐりよせる役割があるようです。長い爪を持つ手はモノをつかむのが苦手なようですが、ゾウの鼻と同じような役割を果たすその鼻がヒマワリの種を食べるのに大切な役割を果たしていると感じました。

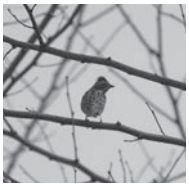
それでは、身体全体を覆う真っ黒でつややかな毛や、いっぽうで毛がまばらに生えたシッポは彼らの暮らしでどのように役立っているのでしょう。どんなに細かい特徴であっても、きっとそれぞれに隠された意味があるはず、と今では考えています。それはほかの生きものにも言えそうです。ヒミズとの出会いから、いっそう興味深く、細かく丁寧に、身近な生きものの姿を観察するようになりました。

ケースのなかのヒマワリの種を食べるヒミズ

中屋敷からこんにちは

道端からひらいた春

●文・写真　西丸 尭宏



中屋敷フィールドにかよい始める5年前まで、ウグイスのさえずりやソメイヨシノの開花というものが春を教えてくれる出来事でした。しかしかよい続けるうちに、春にもいろいろなかたちがあることを知りました。今年はとりわけ足繁くかよったおかげで、冬から春への移ろいがより鮮明に見えてきました。僕が感じたさまざまな「春のかたち」をご紹介します。

オオイヌノフグリ。小指の爪よりも一回り小さな、淡い青の花をつける道端の植物です。僕が今年一番に中屋敷フィールドで春を感じたのは、2月20日にこの小さな花を見つけたときでした。2月下旬というと、都留市はまだ雪の季節。周りの草木はまだ芽吹いていません。そんなときに道端でオオイヌノフグリが咲いていたものですから、冬と春が混じったような不思議な感覚におそわれたことを覚えています。それと同時に、春の萌しを誰よりも早く見つけることができた気がしてうれしくも思いました。

オオイヌノフグリ

この発見のあと、僕の周りで季節が急に移ろい始めました。3月4日には、小屋の前の池でヤマアカガエルの卵塊を2つ見つけました。前日には雪が舞ったほど、冬を抜け切らない気候のなかでのことだったので驚きました。池のなかに卵がゆらめくあいだ、何度か雪が降ることもありましたが、さすがヤマアカガエルの判断は正確なようです。1週間ほどあとにはテングチョウやシジミチョウのなかまなどが舞い始め、3月16日になるとダンコウバイの黄色い花が咲き、中屋敷フィールドは一気に春めいたのです。

こうして春になると、僕が気になり出すのはジョウビタキやカシラダカ、ツグミといった冬鳥のことです。春は彼らが北へと旅立つ季節。僕は歩くたびに彼らの旅立ちはいつだろうかと胸を躍らせていました。まだかまだかと足を運ぶのですが、結局3月のあいだは渡る気配を見せませんでした。4月16日、約2週間ぶりに中屋敷フィールドを歩くと、ツグミの姿はあるのですが、ジョウビタキとカシラダカが見当たりません。どうやら今年はこの2種のうち、どちらが先に旅立ったのかを見逃してしまったようです。

ヤマアカガエルの卵塊

この日、都留周辺ではソメイヨシノが満開。イワツバメも飛来していました。これらの出来事と冬鳥の渡りとのあいだに時期的な関係があるのか。年をかさねながら観察していけば、春という季節がよりいっそうたのしいものになりそうです。

●（にしまる・たかひろ）今春に本学を卒業。昨年度は、緑表紙の野帳を片手に都留の山へとかよい詰め、「森歩きの野帳から」を連載

○ 右上にあるタイトル下の写真は、カシラダカ

うら山図鑑　第10弾
「ハ虫類」

桑大山だより
OHKUWAYAMA NEWS LETTER

ハ虫類は今から3億年ぐらい前に、両生類の一部から進化し、完全に陸上に進出した、わたしたちの祖先です。その後、種類も増えてとても栄えましたが、今から6500万年ぐらい前に多くが滅んでしまいました。ハ虫類が作り出した水分を通さない皮膚のおかげで、わたしたちも体内に多くの水分を保つことができます。ハ虫類は世界に約6600種類、日本には80種類くらいいます。山梨では15種類、都留市でも12種類確認されています。

①ヘビのなかま

ヘビには手足など、ないものがたくさんあります。でも、いろいろなことができて、たいへん栄えているなかまです。

耳（外耳）や鼓膜もありません。音はあごでキャッチしています。また、まぶたがなく、目を閉じることはありませんが、透明なうろこが目を守っています。

都留市には8種類のヘビが生息しています。

アオダイショウ――木登りが得意です。

シマヘビ――4本のしま模様があります。

ジムグリ――地中にもぐります。

ヤマカガシ――ヒキガエルが好物で毒をもちます。

マムシ――毒があり、攻撃性があります。

ヒカバリ――水辺にすんでいます。

シロマダラ――夜行性です。成長すると模様が消えます。

タカチホヘビ――夜行性です。ミミズなどを食べます。

ヒカバリ

おなかのうろこを上手に使って、真っ直ぐに進んだり、体をくねらせて素早く移動したりします。木登りや泳ぎが得意なヘビもいます

ヤマカガシ

ヘビは自分の頭より大きなものを飲み込むことができます。下あごの左右の骨は骨どうしでつながっておらず、あごが靱帯（じんたい）と筋肉でつながっていて、伸び縮みします。そのため大きなえものを丸のみすることができるのです

アオダイショウ

先が2つに分かれた舌を、チョロチョロ出しているのをよく見かけます。これは、空気中や地面の匂いの粒子を集めているところです。こうしてえものや敵（捕食者）を見つけたり、交尾の相手をさがしたりします

アオダイショウの横顔

カナヘビの横顔

②トカゲのなかま

都留市には、ニホントカゲとカナヘビの2種類が生息しています。姿や食べ物（昆虫、クモ等）など似たところも多くありますが、違いもあります。

たとえば、ニホントカゲよりカナヘビの方がしっぽが長いです（体長に対する割合）。ニホントカゲは体の表面につやがありますが、カナヘビはザラザラと乾いた感じです。

カナヘビとアオダイショウの横顔を比べてみましょう。カナヘビには耳とまぶたがあります。目をつむる時、まぶたは下から上に動きます。

③カメのなかま

都留市では、クサガメとアカミミガメの2種類が確認されています（ともに放たれたものの可能性が高い）。

ハ虫類は、太陽の光で体温調節をする、省エネの動物です。さわるとひんやりしています。出会ったら、そっと観察してみましょう。

※マムシとヤマカガシは毒があるので注意!!

むやみに手を出さないようにしましょう。

カナヘビ

低い木に登ることも多く、敵が来ると茂みに逃げ込む

ニホントカゲ

地面にいることが多く、敵が来ると石や倒木の上に隠れる

小口尚良（東桂小学校教諭）＝文・写真

FIELD·NOTE News

April-May 2011

麦の土寄せ

中屋敷フィールドでは11月にイネを収穫し、その後すぐにムギを播く二毛作をおこなっています。5月3日はムギの根元に土を寄せる作業をしました。大きくなったムギが倒れないように支えたり、水はけを良くしたりする目的があります。ムギは私の膝下まで育っていました。早くも収穫が楽しみです。端から一畝ずつ土をおこして土寄せをおこない、畝の周りの草を刈って、6人で2時間弱かかりました。　(石川あすか)

図書館の展示替え

本学附属図書館の展示スペースが新しく入れ替わりました。“図書館から森へ、森から図書館へ”をコンセプトに、図書館横のビオトープの写真の紹介や、オトシブミの標本に説明を加えての展示をおこなっています。ビオトープには、県内でも貴重な生息地である富士吉田市のメダカのほかに、昨年からはオタマジャクシも姿を見せています。都留の自然に気軽に触れられるので、ご覧ください。　(平井のぞ実)

駅の展示替え

5月18日、都留文科大学前駅待合室の展示替えをおこないました。キャンパスに見られる生きものを写真で紹介しているほかに、リスが食べた、アカマツやオニグルミ等の標本の展示もおこなっています。駅の利用をきっかけに、キャンパスから裏山に至るまでのさまざまな都留の自然に興味をもつことができるよう心がけています。駅にお立ち寄りのさいには、どうぞご覧ください。　(反保智栄)

メダカの引っ越し

4月15日、本学附属図書館横のビオトープで、池のメダカをほかの水場へ移動させる作業をおこないました。メダカを1つの水場だけで飼っていると、その水場で病気などが出た場合、メダカたちは全滅してしまうそうです。それを防ぐために、池から8匹のメダカを網ですくって、2～3匹ずつ小さな水場へ移動させました。メダカはすばしっこくて網ですくうのには苦労しましたが、みんなで談笑しながらの楽しい作業でした。これからの週に一度の作業も楽しみながら、ここを通る人にも楽しんでもらえるようなビオトープにしていきたいです。（持田睦乃）

種まき

5月21日、都留文科大学前駅横の三ノ側ビオトープで、ヒャクニチソウとヒマワリの種をまきました。夏には色とりどりの花と、そこへやってくる生きものが見られるはずです。いまビオトープには、マリーゴールドが植えられアイリスが紫色の花を咲かせています。ユリのなかまもこれから花をつけます。水場にはたくさんのメダカが泳ぎまわっていました。もう少し水温があがったら産卵するそうです。駅をご利用のさいは、ぜひのぞいてみてください。（香西恵）

～鳥の観察会のお知らせ～

鳥の観察会を毎週水曜日と金曜日に始めたのは、「一緒に鳥を見ませんか？」という小さなお誘いを投げ掛けてみようと思ったからです。都留市内ではこれまで、約140種類ほどの鳥類が記録されています。しかし、1日に見られる種類は20種ほどでしょう。植物や昆虫などとくらべると少ないものの、私たちの身の周りにはさまざまな鳥類がいます。キャンパスやその周辺にどのような鳥類が生息しているのか。自分の目と耳で確認することによって、よりいっそう彼らを身近に感じられると思います。日時は、水曜が午前9:30～10:30、金曜は11:30～12:30となっています。興味のある方は、地域交流センター出入り口にお集まりください。（西教生）

FIELD NOTE

no.69 Jun.

発行人
北垣憲仁〔22-23〕
統括編集者
西教生〔19-21,46〕
編集長
石川あすか〔4-5,8-9,30-31,32-33,41〕
副編集長
香西恵〔1,16-17,30,48〕
牛丸景太〔10-11,38-39,44-45〕
前澤志依〔2-3,12-15,31,38-39,46〕
編集
狩野慶〔40〕
大澤かおり〔36-37,46-47〕
北村彩乃〔46〕
崎田史浩〔6-7,24-27,30〕
反保智栄〔44-45〕
平井のぞ実〔44-45〕
藤森美紀〔34-35,42-43〕
持田睦乃〔28-29〕
木村元美〔18〕
ロゴデザイン
工藤真純

撮影者のことば

表紙（05.01）：石川あすか
ミュージアムつるでおこなわれた雛まつり展にて。会場の和やかな雰囲気を招き猫が物語っているようです。

裏表紙（05.03）：同上
大月は初狩、笹子のあたりで川を、もとい空を泳ぐこいのぼりの一団。下から見上げるこいのぼりは空を泳いでいるように見えました。

FIELD･NOTE（フィールド・ノート）
発行日：2011年6月30日
発行部数：400部
発行・編集：
〒402-8555
山梨県都留市田原3-8-1
都留文科大学
コミュニケーションホール地下1階
地域交流研究センター
フィールド・ミュージアム部門
『フィールド・ノート』編集部
E-mail：field-1@tsuru.ac.jp

編集後記

気になる場所

もうすぐ夏がやってきます。山に囲まれた地域で生まれ育った私にとって、海はなかなか見れない貴重なもの。だから毎年、夏になると隣県の海に会いに行きます。キラキラと光る海が一瞬見えただけでも「海だー！」と大興奮。海へ行ったからといって、遊ぶわけではないけれど、波の音を聞きながら、海に沈む夕日を見るのが私のお気に入り。ただなんとなく海を見に行きたい。その思いに駆りたてられて、今年もついつい海へと足を運ぶのです。　（前澤志依）

えふでで描いたように鮮やかでやわらかい色合いの5月の土手。その土手は故郷へ帰ると度々行きたくなる場所です。前回来たときは3月下旬だったのでヨモギやツクシがたくさん見られました。歩いたその日は曇りだったけれど目の先に広がる若葉色の絨毯が眩しい。耳を澄ます。チチーと飛び交うツバメ。クァッ、クァと鳴きながらヒュンヒュンはばたくカモ。ケーンケーンッと声を張りあげるキジ。色々な声が響き渡る土手は歩いているだけでわくわくする。つぎはどんな土手が見られるだろう。真夏の来る日が楽しみです。

（北村彩乃）

ぎぃぃーーと聞こえる声で初夏に鳴くのはハルゼミです。アカマツの林によくいるようで、そちらのほうから聞こえてきます。鳥のさえずりとは違い音の変化が少なく、意識しないと聞き取れないかもしれません。数年前から都留市でもアカマツは枯れて少なくなっています。もえぎの季節、この先ハルゼミたちの生活する場所がどうなるのか、ちょっと心配です。初夏のアカマツ林は吹く風が心地よく、そこを歩くのが楽しみなのですが、ハルゼミの声がないと物足りません。　（西教生）

©2011『フィールド・ノート』編集部　乱丁・落丁の場合はお取り替え致します。編集部までお知らせください。

次回予告
涼む（仮）
二〇一一年八月
発行予定

FIELD·NOTE no. 69

発行日 2011年6月30日（年4回発行）
発行所 〒402-8555　山梨県都留市田原3-8-1　都留文科大学　コミュニケーションホール地下1階
地域交流研究センター　フィールド・ミュージアム部門　『フィールド・ノート』　編集部

野生を育む GrowWild
都留文科大学
フィールド・ミュージアム
Decent Wildlife and Our Community